

何事かをなし得た人 に見る、言語変化の一兆候 ： 補助動詞 ～得る の意味変化

著者	島田 泰子
雑誌名	近現代日本語における新語・新用法の研究
ページ	38-55
発行年	2014-03-28
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ； 13-03
URL	http://doi.org/10.15084/00002747

〈何事かをなし得た人〉に見る、言語変化の一兆候

— 補助動詞〈～得る〉の意味変化 —

島田 泰子

はじめに：「言語変化の先端（的な兆候）を捉えること」をめぐる

まずは、本稿の筆者（以下、稿者）が参加した国立国語研究所の共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」（以下、本プロジェクト）の研究期間終了にあたり、個人的総括としての振り返りと、いささかの問題提起を行いたい。

期間中、本プロジェクトにおいて稿者が主に手がけた研究は、

- ① 広告表現等に観察される、私に^{わたくし}「終止形準体法」と名付けた文法現象とその表現
- ② 若年層における格表示の変異のうち、特に二格表現の移行・衰退現象

の2点をテーマとするものであった。いずれも、今日的な動向を捉えて記述しつつ、その歴史的背景を視野に入れて、目の前で起こりつつある変化を大局的な日本語史の一角に位置付けようとするものであった。現代語研究は、古典語研究（歴史的研究）と対比的にのみ扱われるものではない。過去に（歴史上のある時点で）日本語に起こった言語変化も、現在進行中の変化も、等しく総体としての「日本語の歴史」を形成するものである、という意味において、上記2点のテーマで行った稿者の試みもまた、現代語の問題（現象）を取り上げてはいるものの「日本語史」研究の一環である、という認識でいる。

ところで、若年層における最先端の変化は、旧来の言語規範にのっとりた推敲や校正を経て世に出る類の資料には現れづらい。口頭の発話においても、目上の相手など聞き手との関係性によっては、よそ行きにかしこまったもの言いがなされることで、先端的な変化の動向は観察されにくくなる。当然のこととして、若年層における先端的な変化（の、水面下における動向）は、アンダーグラウンドな媒体や内輪向けの発信など位相を限って行われはじめる傾向にある。新しい世代による新しい意味・用法や表現様式が、俗語やいわゆる若者ことばなどといった、規範性から自由に発せられたもの言いにおいて散々多用されたのちに、書きことばなどのより公的な資料・文脈にまで顔を出すようになった頃には、それらはすでにある程度の一般化や定着が進んでいる¹⁾。使われ始めから時間的にも隔たりが生じてしまえば、変化の発端や経緯などは辿りづらくなる。

しかしながら、変化の発端を担う当事者としての若年層は、それが最先端の変化であることについて自覚的でない場合もまた多い。ある語や表現について、その意味・用法が変化しつつあると気付く（つまり「そのような使い方は以前にはなかった（はずだ）が」と実感す

る)のは、旧来の使い方を知らない若年層には困難なことであり、当然、「新用法」と称される現象の発生は、旧来の用法を知る中高年層において、特に気付かれやすい問題となる。(学術的な文脈に限らず)何らかのメタ的な言及がなされることで、問題の所在が共有されれば、若年層(の研究者)にも、新用法に関する観察や分析の機会は等しく与えられることになるだろうが、少なくとも発端としての、現象への気付きやいち早い指摘といった問題提起については、中高年層(の研究者)が自覚的に、積極的に担わざるを得ない、という実情はあるだろう。そのような役割を担うべき中高年層(の、特に研究者)が、どこまで若年層における日本語使用の生々しい実態(先に述べたアングラな内輪向けのことはば遣い)に立ち会えるかという問題は、いわゆる気付かれない・気付かれにくい言語変化の兆候を捉えることの難しさと連動する。

インターネット上のブログ・質問掲示板・各種 SNS 等への書き込みなどによって誰もが発信者たり得る昨今、旧来の規範を逸脱した日本語の使用例は、より得られやすくなっている。また、BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)のようなデータの位相的な均衡性を謳うコーパスには、逸脱的な日本語の使用例があえて収められていることから、変化の兆候を観察するのに適した用例が収集しやすくなっている。そういった資料群から得られた用例に、どのような代表性を認めるかの判断には、慎重を期す必要はあるものの²⁾、最先端の動向を扱う新語・新用法研究に資するところはやはり大きいと言えよう。

以上、言語変化の兆候をいち早く捉えて記述することの重要性と、それに伴われる課題、資料の特性と注意すべき点、の3つについて述べた。本稿が以下に取り上げる問題も、変化のいまだ兆候にすぎない動向かもしれない、示そうとする事例にも(取り扱いにさまざまな難点のある)インターネット上の用例を多く用いるが、脱規範的な位相で先行的に進行している先端的な言語変化の事例として、やはりここに書き留めておこうとするものである。

1. 「何かをなし得た人」の違和感とその正体

本題に入りたい。昨今、インターネット上でやや定型的な表現のように用いられる「(何かを) なし得た○○」なる表現やその類例がしばしば目にとまる。それらは、以下のように連体修飾部分に多く用いられており、また「なし得る」が完了その他のアスペクト表現「た」((1)(2))・「ている」(後出の(5))・「てきた」(3)や希望・願望の「たい」(4)を伴うなど、旧来の意味では出現しにくい形式を取るものも見受けられ、稿者はこれらに少なからぬ違和感を覚える。まずは事例を示す。

以下、用例の該当部分に下線を施し、被修飾語を二重下線で示した(傍点と波線部分については後述)。「/」で示した箇所には、原文では改行がある(「/」は、二重改行による段落分け)。なお、出典として示したurlは、本稿の脱稿時(2014年1月末)にリンク切れを起こしていないものである。

- (1) 人は自分の生まれた意味を求めたり／また何のために生まれてきたのかとか／そんなことに悩む人が多々いる・・・《略》もし意味があるとすれば／自分が生まれた事ではなく／自分自身がどう生きたかで／その人の生きた証や／意味を見いだせるのではないだろうか？／／何かを成し得た人だけが／生まれた意味を持つのではなく／また広い世界で人の生死は等しく起こる 《略》 でも全く知らない人が生き／何かを成し得た時／それが小さな事であっても／変わる事があるものだ・・・

(個人発信のブログ 記事公開は 2013 年 4 月 14 日)

<http://ameblo.jp/pandemic8888/entry-11510859662.html>

- (2) なし得たように見える写真を撮る

事業に成功した人、結婚した人、家建てた人などを成し得た人と言う。この成し得た数が多い人が、いわゆる「勝ち組」というやつで、周りから羨望の眼差しを送られるわけだ。／しかし何者でもない僕らが、そう簡単に何かを成し得ることはまずない。家も建てなければ、事業で成功もしない。そこで、成し得たように見える写真を撮ってみようと思う。

(実験的企画サイト「デイリーポータル」 記事公開は 2012 年 8 月 11 日)

http://portal.nifty.com/kiji/120809156856_1.htm

- (3) ウイルスの流入の繰り返しでDNAの進化をなし得てきた人類をサポートする「宇宙と火山」(1) (個人発信のブログ、記事表題 記事公開は 2012 年 9 月 23 日)

<http://oka-jp.seesaa.net/article/293815497.html>

- (4) あなたの「自分の全存在をかけてでも成し得たいこと」／はなんですか。／ドキッとしませんか。これ。／先日の『100 分 de 名著』で特集していた／『星の王子様』のテーマです。／《略》／自分の全存在をかけて／成し得たいそれは／子ども時代に自分が知っていたもの。／それは／そのまま自分が生まれた意味、／生きる意味なのかもしれません。

(個人発信のブログ 記事公開は 2012 年 12 月 17 日)

<http://d.hatena.ne.jp/ruribyaku/20121217/1355749051>

(1)に対する違和感の理由として考えられるのは、この実現が可能であることについて言う〈動詞連用形+得る〉と、それがすでに実現・成立したことを示す完了の「た」、その組み合わせ「なし得た」による名詞「人」「時」への限定修飾、かと思えば個別の具体的な事例に言及するのでもなく、「何かを」と不定のマーカーを添えて一般論として述べる、そのいずれもがチグハグでそぐわない、ということであろう。可能を大きく2種類に分類する渋谷(1993b)の術語に即して言うなら、〈動詞連用形+得る〉の持つ「潜在系

（potential）の可能」の意味が、「た」を伴い完成相として「実現系（actual）の可能」に転じるものの、実現系可能がその意味特徴から通常表すはずの「一回的な動作の実現」を表さず、むしろ潜在系可能が帯びるはずの「状態的な意味の様相」が含まれる、その入れ替わりに近い混乱が、これらの用例に対する違和感の原因ということになる。(2)は、具体例を並べる点で、実現系可能の用例らしく一回性のことがらについて言うかに見えるものの、枚挙的に「数」の問題に言及し、やはり「何かを」を伴った一般論に終始する点で、(この「なし得る」を旧来の意味に取る限り、) 奇妙な違和感を拭えない。

可能表現が(3)のように「～てきた」というアスペクチュアルな形式で使われるのは、可能動詞における「書けるようになった」(渋谷(1993b)に言う「潜在可能獲得」の完成相形式)と同義の、「(読解力の弱い読み手が、テキストを繰り返し吟味することで) だいぶ本文が読めてきた」「(建前ばかりで本音が見えづらい相手と向き合うことで) 真意がようやく掴めてきた」(ともに稿者による作例) のようなものであるから、「(「ウイルスの流入の繰り返し」という要因によって) 次第に進化が可能となってくる」話ではない(3)には、稿者はやはり違和感を禁じ得ない。また(4)のような、可能を表す〈動詞連用形＋得る〉と希望表現「～たい」との共起は、「～(することが) 出来たい」や〈可能動詞＋たい〉などと同様、本来は非文に相当する不整合のはずである。

前後の文脈から判断して、これらの下線部における「なし得る」は、ほとんど「なしとげる」と同義と見られる。(2)は、冒頭に具体例が3つ示されており、さらにこの後は(5)のように続く。この記事の記者²³にとっての「なし得る」が、すでに可能表現ではなく(「～ことはできない」との重複的な共起が成立するのはその証左)、さまざまな困難を克服して何らかの成果を上げ、欲しいものを手に入れることを表す語となっていることが知られるが、この新しい語義を周辺的に支える構成要素である、困難の克服や努力の果ての達成(感)といった文脈的条件は、「生まれてきた意味」や「生きた証」などに関連付けて語られる(1)(4)においても同じく認められる。

(5) 成し得るとは？

たとえば何かの競技で金メダルを取ったとする。その金メダルまでには様々な物語があったと思う。休む暇なく練習しただろうし、ケガに苦しめられたこともあっただろう。そんな苦しみに耐えた結果、金メダルを手に入れ成し得た人になったわけだ。

しかし、多くの人がそんな苦しみには立ち向かわず、金メダルを取ることもないだろう。それに練習すれば必ず取れるものでもない。周りに勝たなければならない。つまりそう簡単に成し得ることはできないのだ。そこで、成し得たように見える写真である。

《稿者注：競技場で模造品の金メダルを自慢げに見せてポーズを取る写真を示し、》
どうだろう。成し得ている。この写真をパッと見せられればどう思うだろうか。金

メダルを取ったんだ、と誰もが思うだろう。夏の太陽のように眩しい笑顔にスポーツドリンク、そしてバックは陸上競技場。金メダルを取ったことを疑う余地がない写真だ。 《以下略》 (2)のつづき)

(5)に続く部分では、さらに、他人の家（新築一戸建て）の前で記念撮影を気取り、まるでマイホームの夢を叶えたかのような写真を撮ってみたり、高級ブランド店の前で紙袋を掲げいかにも高価な商品を買ったような写真を撮ってみたりと、闊達なおふざけが続く。本来、何らかの努力や犠牲と引き替えにようやく成しとげるはずのことがらを、いともたやすく実現した（かのような）気分になってみる、という遊びであるが（「デیلیーポータル」は、その手の自由な発想と実験性に満ちた遊びを展開して楽しむ企画サイトであり、その理念に基づき記者たちがそれぞれのアイデアを競って写真入りで報告を行うものである）、このお気楽な安直さがエンターテイメントとしてある種のおかしみを醸すのは、彼らにとっての「なし得る（＝なしとげる）」が、場合によっては(4)「自分の全存在をかけて」という悲壮な決意や鬼気迫る覚悟のもとになされるものとの認識があるからに他ならない。

2. 「なし得る」を使いたがる人たち

前節で観察したとおり、ものごとを行う意の動詞「なす」と、それが可能である意を表す「～得る」の複合である「なし得る」（することができる）は、新たな用法を獲得して使われている。そもそも「なし得る」という表現がどのような位相的特性を有するものであるか、ここで少し検討を加えておきたい。

まずは、「なし得る」が文章語的なもの言いであって、印象としてお堅い、あるいは、ものものしい、もったいぶった響きを伴うものである、という性質について、指摘する必要がある。あえて古めかしい表現を借りれば「こばした表現」ということになるだろうか。

「こばす」とは、古く日葡辞書にも「Cobaxi, su, aita」とある動詞で、仮名草子や咄本にも例が見られるなど、近世期まで口頭語で用いられていた。その語義は以下のとおりである。

知ったかぶりをする。古語、漢語などを用いて、きどった言い方をする。わざとむずかしい言い方をする。きどる。てらう。 （日本国語大辞典 第二版）

動作や行為を全般的に表す動詞の最も今日的な口頭表現は、「する」「やる」であるから、これを「なす」で表そうとすることじたい、ある種の「こばし」である（これを中・近世語「こばす」を使って「こばし」と呼ぼうとすることじたいも、まさに典型的な「こばし」と言えよう）。また、可能表現として用いるものについても、口頭では今日「～（ことが）できる」や可能動詞がより一般的に行われ、相対的に「～得る」のほうは文語的表現の文章

語的残存という位置付けで捉えてよい^{*4}。口頭における〈動詞連用形＋得る〉は、例えば「言い得る」「探し得る」なら、可能動詞「言える」「探せる」や「言うことができる」「探すことができる」の、それぞれ「こぼした表現」と言うことになる。

同じ意味を担う複数の表現形式（あるいは複数の同義語）が選択肢として存在し、それらの間に通時的な新旧の関係が存在すれば、古いほうの表現が、口頭において行われ（ることの少）ない「文章語」的な位置付けに追いやられ、その結果、自ずと「雅語」的な位相を帯びる。一般的な語彙の消長のありようの中にしばしば観察されるこの構図は、事例に事欠かない。例えば、下二段動詞が一段化する過程で「書きことばに於いて」行われる「与ふる」「加ふる」などの二段形を、「上品であって従ってまた力のある」語形としたロドリゲス日本大文典の記述（「動詞の活用に就いて」附則二）などは、そのあたりの事情を反映していよう^{*5}。橋本（1990）が示す「よごる・よごす」と「けがる・けがす」における今日的な表現差（抽象度の違いなどを含む意味差）の事例も、新旧ではなく和漢の文体差に端を発する点がやや異なるものの、漢文訓読調から文語調へと転じた後者（けがる・けがす）が前者（よごる・よごす）の「こぼした表現」に相当する点で、類例に数えられる。

「なす」にも「～得る」にもある種の「こぼし」が含まれる「なし得る」は、学術論文の標題において頻繁に用いられている。国立情報学研究所の論文検索ツールCiNii Articlesで検索したところ、「なし得る」61件^{*6}、「なし得た」23件^{*7}のヒットがあった（2014年1月末現在）。学術論文における「なし得る」の使用には、「気取り」や「知ったかぶり」だけではなく、ある種の「改まり」とも呼ぶべき「位相的なふさわしさへの配慮」があると見られるが、それも含めて、こぼしたものの言いとしての「なし得る」の印象や味わいは、十分に注意されてよい。

そのような「なし得る」が、（学術的な文脈ではなく）実業界での啓発的な文脈にも多用されることは、注目される現象である。以下は事例の一部、(6)は実学系大学に付属の実業系研究所が「法人のお客様」向けページに設けた連載コラム（ビジネスパーソンを対象とする通信研修講座の広報を兼ねる）のプロローグ「連載開始にあたって」に見えるもの、(7)は、転職求人情報サイトで「会社じゃ教えてくれないココロの扱い方」と題して連載中のコラムに見られるもの（第44回の表題部分）である。

(6) リーダーシップ「第8の習慣 (R)」 ～いま、求められるリーダーシップとは？

《前略》 「偉大さ」とは何でしょうか。／「偉大な人物」「偉大な記録」「偉大な功績」といった言い方をするように、ここでは “その人だけにしか成し得ない卓越したこと” といった意味で使われています。

（産業能率大学 総合研究所 連載コラムより。 公開日不明、2012年末頃か^{*8}）

<http://www.hj.sanno.ac.jp/cp/page/8946>

(7) 【人が何を成し得たかは、他の人の心に何を残したかで、測るべき。】

気高く生きたい。／気高く歩みたい。／／そんなことを今日も、／冬の空気は、突き刺さる陽射しと共に教えてくれます。

／12月になりました。／／ここからもあつという間です。／／時の流れは速くなるばかりです。／／密度はどんどん濃くなっていき、／一つの終着駅を迎える。／／頂上から見える景色を登山口に変えるために。

／熱く、熱く、生きましょう。

／満月が詩をくれました。／／今回も唐突に詩を一句。 《以下略》

(転職サイト PROSEEK 連載コラム^{*9} より。記事公開は2010年12月1日^{*10})

http://www.proseek.co.jp/pb/contents/column/satouyoshiaki_101201.html

これらの用例に代表される、「偉業の達成」を意味する「なし得る」のビジネス的文脈における多用（流行とも呼べるかもしれない）には、先に記述したような、「なし得る」にまつわる位相的な特性とそれに基づく表現性が大きく関わっていると考えてよいだろう。

「なし得る」は、ロドリゲスが言うところの「上品であって従ってまた力のある」もの言いとして、平たく言えば「格調高く、ありがたい」訓示の類になじむ、ということである^{*11}。

インターネット上の記述に限らず、達成することをこぼして「なし得る」と表現することが、会社などの組織において口頭でも行われているであろうことは、想像に難くない。時期的に相前後する(8)(9)のような記述は、その想像の一助となろう。

(8) 成し得る【なしえる・なしうる】なし得る

物事を達成・遂行することが可能である、といった意味の表現。

(「実用日本語表現辞典」 記事公開は2011年7月9日)

http://www.practical-japanese.com/2011/07/blog-post_4992.html

(9) 質問：「なし得た」と「 《略》 」という意味は何ですか

《略》 中国人だから、分からない、お願いします

回答：ここでの「なしえた」は「成功した」という意味で使われています。

(Yahoo!知恵袋より。「日本語」カテゴリへの質問 書き込みは2011年5月23日)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1362901003

(8)は、インターネット上に設けられた用語解説サイトの類（開設者の素性は不明）であるが、「実用的で現代的な日本語の表現について解説する辞書・辞典サイト。ビジネスの現場や電子メール、あるいは職場の上司などから聞いたような、現代的な日本語の中で、特に実用的な場面で利用される言葉を解説します。」（注目部分への破線は稿者）と謳われたこのサイトに取り上げられる見出し語の中に、「なし得る」が含まれているのが興味深い。

「ビジネスの現場」で「職場の上司」から聞いたことばが理解できず困った外国人（日本語非ネイティブ）の就労者が発した質問が(9)だと見るならば、先の想像も「ビジネスの現場」の実態に遠からず、ということになる。

(6)に代表される、ビジネスシーンでの「なし得る」は、偉業の達成に憧れ、それを目指す文脈において、自他を叱咤し鼓舞する際のキーワードとして定着している、と記述できる。「叱咤」のトーンを和らげるための「ポエム化^{*12}」を経た、「激励」や「慰撫^{*13}」の定型表現として用いられたのが(7)や前節の(1)(4)であり、先の(2)(5)は、そういった価値観や風潮への揶揄的なパロディとして位置付けられよう。

ちなみに、こういった新用法での「なし得る」多用とその背景にある風潮は、ビジネスシーンに留まるものではなく、若年層が好んで聴く、いわゆるJ-POPと呼ばれるジャンルの音楽で展開される感動系応援ソングの類に見られる激励調の歌詞にも確認できる。

(10)(11)は、単独の動詞「成す」では名詞「夢」を対格に取りづらい（「夢をなす」という共起関係は、日常的な慣例として存在しない）点で、「なし得る」を、動詞「なす」の可能表現ではなく、「達成」を表す動詞と見るべきであろう。特に(11)「夢を成しえられない」は、(5)「簡単に成し得ることはできない」同様、可能表現の重複を許容している点が、語義変化を裏付ける指標となる。

(10) 僕は期待に応えたい ここで勝たなきゃ未来は貰えない／Runnin' on Runnin' on my way／これからもずっと壊れるまで／Runnin' on Runnin' on my way／やさしさはいらない 欲しいのは結果だけ／《略》／明日は勝つぞ 成しえなかったあの夢を／切り裂く風を追い越して 才能よ今こそ目覚めよ／なんでこの世に生まれたか その答えはラインの向こう側

(SEAMO with BENNIE K「Runnin'^{*14}」 CD シングルは2005年10月12日発表)

(11) 砂をかむような思いで 道を踏みしめてきた人に／乗り越えていかなくちやならぬ壁は訪れる／《略》／誰も一人きりで生きる事などできはしないだろう／誰も一人ぼっちで夢を成しえられない／／倒れそうな時に 手をのばして支えてくれた／だから いつかこの姿が 誰かのチカラになればいいな／あの日のように

(SHACHI「VOICE^{*15}」 収録アルバム「Get the Dr.Martens!!」は2007年8月発表)

孤高のアスリートのように「これからもずっと壊れるまで」走り続け（Runnin' on）で「勝つぞ」、と宣言する(10)は、(2)の「勝ち組」や(5)の「周りに勝つ」に通じ、いささか強迫的に自らを鼓舞するトーンは、今日的な世相（長引く平成不況とそれに由来する雇用不振に基づく、旧来の社会機構の変容や崩壊）に裏付けられた、人生の苛烈な競争のイメージを想起させる。それを和らげる「ポエム化」の例と位置付けられる(11)は、やはり(1)(7)に連

続している。波線部についても同様に、(11)「誰かのチカラになれる」自分（の探求）というモチーフは、他者への（ささやかな）貢献で自身の存在価値をはかろうとする(7)の発想と同じであり、(10)「なんでこの世に生まれたか」という問いは、(1)(4)における「生まれてきた意味」や「生きた証」と同一のテーマである。

3. 「なし得る」「なし得た」はなぜ誤解されたか

行為全般の成立や実現が可能であることを表す「なし得る」が、可能の意味でも目標や偉業の（努力の結果としての）「達成・遂行」(8)に関して言うものと解釈されたり、「なし得た」という完了形式が「成功した」(9)の意とされたりするのは、現にそのような意味で多用される現状から帰納してのことと考えられる。逆に、そのような用例が蔓延したのは、「なし得る」の語義に対してなされた新たな解釈（平たく言えば誤解）の演繹的な実践によるものであるから、両者は循環的である。この循環の契機や発端は、どこに求められるだろうか。

新旧の用法を仲介するかのような用例も見られる。(12)(13)は、後述する条件句との共起など、用法において旧来の規範から特に逸脱しているとは認められないが、上に示した用例群と同じく「達成」の意味に近い解釈は可能であり、文脈的にも、(12)「戦う」「勝つ」というキーワードに見られる発想（その「ポエム化」が(13)）や、波線部「私の存在価値」「(誰かに必要とされる)自分」の探求というモチーフまで、(10)(11)にそっくりである。

(12) ここで今は勝たなきゃいけない 戦おう

この手にしてきたもの 努力なしじゃ成し得ない／私の存在価値 私自身が証明
(加藤ミリヤ「My Soul」^{*16} 収録アルバム「Diamond Princess」は 2007 年 3 月発表)

(13) 探し物は見つかったの？／《略》／信じていれば夢は叶うだなんて 口が裂けても
言えない／だけど信じてなければ成し得ないことが／きっと何処かで僕らの訪れを待
っている／《略》／長いこと続いた自分探しの旅も／この辺で終わりにしようか／
明日こそ 誰かに必要とされる／自分を見つけない

(Mr.Children「Prelude」^{*17} 収録アルバム「SENSE」は 2010 年 12 月発表)

こういった用例を介して「なし得る」の語義は誤解された、と推定することは出来よう。その間の背景や事情として容易に想像されるのは、以下のようなことであろう。

「なし得る」と「なしとげる」は、共通する「なす」を複合動詞の前項に持つ（そしてともに下一段に活用する動詞である）ことによって、音の響きという表層的な類似性を持つ。こぼした表現である「なし得る」に日常的になじんでおらず、旧来の語義を明確に認識し

ていない・正確に理解していない層は、音の類似から意味を類推することになる。これが、両者の意味を混同させる要因となった。「なす」じたいが、先にも述べたとおり、「なせばなる、なさねばならぬ」などのことわざにかたがた残存する程度で、日常的には行われない）文語調の語であること、またそれと連動して「なし得る」「なしとげる」以外に動詞「なす」を前項に持つ複合動詞がほとんど存在しない^{*18} ことも影響を及ぼしたと見られる。あるいは、「成し得る」という漢字表記を目にすることで生じる、「成功」への類推（当然その逆もまた考えられよう、「成功」の意であるとの類推的な誤解による「成し」表記、そして、それらの循環による誤解の再生産）も関係すると考えられよう。

しかし、そのように推定してもなお、以下のような疑問は残る。(12)(13)のような例は文脈的な類似性において新旧の用法を仲介するかに見えるが、これらの「なし得る」をそのまま「なしとげる」に置き換えるならば、(12)「努力なしじゃ なしとげない」、(13)「信じてなければなしとげない」であり、「否定を伴う条件下における、帰結としての不可能」を意味する類型としては、十全ではない。「～しなければ（条件）～できない（帰結）」という呼応における可能表現に該当する傍点部分を欠くからである。「成立」や「達成」に語義を転じて、なお、条件句との呼応では、やはり

(5)「苦しみに立ち向かわず」して（条件）－「簡単に成し得ることはできない」（帰結）

(11)（他者の支えなくして）「一人ぼっちで（は）」（条件）－「夢を成しえられない」（帰結）
のように、やはり可能表現が要求され（新たに補われ）る以上、そこには飛躍があると言える。この飛躍を超えて語義が誤解される事情は、どのように考えられるだろうか。

先に、「なし得る」の語になじんでおらず旧来の語義を明確に認識していない・正確に理解していない層、というものを想定したが、それは、「なし得る」に限らず文語調の「～得る」全般にあまり縁のない非教養層、なかんずく若年層のことである。類例として、同じ層において観察される「あり得ない」の意味変化が、ここに関連付けられよう。

未実現のことがらについて言う「あるはずがない」（「存在・出来・実現するはずがない」）という可能性の否定に用いられる「あり得ない」は、若年層を中心とした世代では、実際に出来・実現した事態について「受け入れがたい」「許容したくない」「拒絶したい」に近い、情緒寄りの評価的な用法で多用されている。新旧の用法をつなぐのは、「（本来ならば）あるはずのない」「（通常状況下では）起こるはずのなかった」、信じがたい・あつてはならないことがらについて批判的に述べるという、文脈的な共通性に基づく含意である。

ここにも、以下のような条件句との呼応が構成されている（ただし、「肯定の条件下における、帰結としての不可能」という点で、条件句が否定を伴う「なし得る」の呼応とは異なる）。

「本来ならば」（条件）－「あるはずがない」（帰結）

「通常状況下では」（条件）－「起こるはずがなかった」（帰結）

このことは、「可能」という意味のありかたそのものにまつわる本質的な構造に関わることとして説明される。森山（2002）は、「あり得る」「起こり得る」などの「～得る」について、以下のように分析している。

(14) 「～得る」も、本来「可能」を表すものが、「可能性」を表すようになったと言えそうである。この共通義としては、当該事態が潜在的に存在するということがあると言える。すなわち、「ある事態が成立しないとは言えない（場合によっては成立することもある）」という表示が「可能性」であるが、「潜在可能」は、「動作主にとってある事態が成立するための能力や状況があり、必要な場合にはその事態が成立する（不可能の場合には必要なのに成立しない）」という意味であり、この両者には連続性がある（可能が述語レベルなのに対し可能性は事態レベルという違いはある）。さらに、いわゆる「実現可能」は、その潜在的な成立可能性が実際に実現するという意味にスライドした意味となっていて、「動作主にとってある事態の成立が必要であり、かつ、能力や状況といった外的条件が関わるために成立するかどうかわからないなかで、実際に成立する」という意味になっている。つまり、「潜在可能」を中央に位置づければ、実際の成立を見る点では「実現可能」へと連続するのだが、一方で、広義の事態成立条件への言及をなくし、事態を全体として問題にするならば「可能性」へと意味拡張しているのである。

この記述を、いま私に^{わたくし}整理して表にするなら、(15)のようになろう。最上段に示した「可能性」の表現は、森山（2002）が言うとおりの、通常は「広義の事態成立条件への言及をなくし」（このため表の左側2つは空欄「－」となる）、「事態を全体として問題に」した上で「あり得る」か「あり得ない」かを述べるものである。しかし先に述べた、特殊な条件下で出来た異常な事態に対しては、それが通常の可能性に反して実現済みである以上、事態成立の可能性に関わる背景的な部分に言及せざるを得ない。それが、「あり得ない」の前に「本来ならば……」「通常の状況下では……」と置かれる（はずの）条件句部分であり、その前置きを欠いて用いられる「あり得ないことが起こってしまった！」「あり得ない頼みごと（をしてくる相手の厚かましさに、腹が立った）」「なにそれ。あり得ないよ」などの用法から、「信じがたい・あってはならない」の含意を介して「受け入れがたい」「許容したくない」「拒絶したい」という新たな語義が成立したと考えられる。

(15)

	ある事態が成立するための能力や状況	成立の必要	事態の成立
可能性	－（不問）	－（不問）	「成立しないとは言えない」 ＝場合によっては○（有）
潜在可能	○（有）	○（有）	○（有） ※ ここ↑が×（無）だと「不可能」
実現可能	？（不明）	○（有）	○（有）

本稿が問題とする「なし得る／なし得ない」（可能性～潜在系可能）や「なし得た／なし得なかった」（実現系可能）についても、いま述べた「あり得る／あり得ない」同様、語義のズレや誤解の背景として、条件句の欠落という契機を想定することは可能であろう。

とりわけ、特段の条件下において行為の実現がかなった、という実現済みの事態について述べる場合（完了の「た」が伴われるもの）には、事態成立の要因である「特段の条件」の明示を伴う〈「～によって」「～からこそ」－「なし得た」〉という〈条件－帰結〉の構造^{*19}とそれに基づく共起関係が生じることになり、「少納言」経由で検索した BCCWJ の用例にも、それは見いだせる（新たな語義を生じていないと見られる年代・世代の例^{*20}を以下に示す）。(18)は、(16)(17)とは逆に、特段の条件下においてかなわなかった場合である。

この条件句(16)「～の故に、」(17)「～により、」等を落としたかたちで、つまり後半部分の「なし得た」のみがこぼした表現として印象に残り、文脈から「なしとげた」の意に解釈され直したものが、新たな用法の発端となった、と考えられるのではないか。

(16) 中宗は必ずしも立派な皇帝とはいえないが、あの太宗ですら、さまざまな欠点があり、それでいながら、直言を喜ぶという度量の広さの故に、あの「貞観の治」をなし得たのだということを示し、中宗にもそのようであってほしいという願いが込められていたのである。（『貞観政要』の読み方^{*21}』日本経済新聞社、2001年）

(17) わが国は、国民の英知と努力の結集により、経済力の増大は言うまでもなく、国民生活の面でも大きな向上をなし得ました。また、社会保障の面におきましても、医療保険、年金保険制度を初め、いずれも西欧先進諸国に比して遜色のない水準に達しております。（国会会議録 第91回国会、1980年 野呂国務大臣の発言）

(18) といふのは、國の危機を察知し、その原因を知り、對策を考へるものなら、如何に、「新論」が必要かといふことを十分に了解してゐるのであります。しかしその危機を痛感しつつも「新論」の如き言論機關を創設するといふことともなれば、その構想と計畫の大きさのために、誰一人としてこれをなし得なかつたのであります。

（『保田与重郎^{*22}全集』別巻1 講談社、1989年）

「なしとげる」が偉業やそれに近い行為について述べる動詞である以上、それと同義に解釈された段階で、相応の努力や苦勞などといった文脈的背景が含意されるのは十分考えられることであるが、「なし得る」はまた、行為の実現について最大の可能性を有する主格を示した上で、それでも不可能であったと述べる類型を持つ。その場合、次に示す例のように、その行為は(19)「天皇家の外戚になる」ことや(20)「禁欲的倫理の復活」など、決して卑小なものではない。このあたりの用法は、「なし得る」が新たに獲得した「偉業の達成」という意味へつながっていると見られる。

- (19) 平清盛の故事に倣って、信長も秀吉もなし得なかった天皇家の外戚になることを、徳川氏が果たしたかったのだと思う。

(田中澄江 著『人物日本の女性史』第5巻 集英社、1977)

- (20) この二〇年間、古い価値の擁護者、宗教関係者、道徳論者が全力をもってしてもなし得なかった禁欲的倫理の復活を、エイズは短期間にもたらしたのである。

(ホーン川嶋瑤子 著『女たちが変えるアメリカ』岩波書店、1988)

4. 「なし得た」を誤解した人たち

「あり得る」「なし得る」をはじめとする「～得る」全般に縁のない非教養層・若年層に属する日本語の使用者によって、前節に述べたような経緯で語義の新解釈（誤解）が成立したとするなら、構文上の重要な要素である条件句を脱落することを許容する、さらなる事情が考察されなければなるまい。

構文全体への厳密な意識が保持されれば脱落は起こりにくいはずであるが、「なし得る」を新たな意味で用いた例をつぶさに検討すると、そもそも文面全体が相当ゆるやかな規範意識に従ってなされたものであるのに気付かれる。

言うまでもなく、インターネット上で行われる日本語表現は、オンライン公開された学術資料や報道などの分野における情報^{*23}を除いては、刊行物などの活字資料に見られる、旧来の規範に従った日本語表現とは、位相を大きく異にする。(1)を例として具体的な指標を示すなら、三点リーダー1つ分をナカグロ3つで代用する習慣や、文中での頻繁な改行による「ポエム」ふうの表示（文末ごとにダブル改行コードを挿入して段落を改める）など、ある層に特有の典型的な流儀（ケータイ小説などではそれが主流）である。

こういった表層的な表記の次元に観察される特徴と、その書き手の日本語の運用能力とに、どこまで関連性を見いだすかについては、なお十全な検討が待たれよう。しかし少なくとも引用冒頭における非文めいた構文のねじれ^{*24}に見られるように、(1)は一定以上の鍛錬を経た書き手や校正者により意識的に推敲された「整った」日本語文とは隔たりの感じられるものである。同様のことは、限定の助詞が「だけ」「しか」と重複する(6)「その人だけにしか成し得ない卓越したこと」や、(7)にも言えよう。(7)において「冬の空気」が「(突き刺さる陽射しと共に) 教えてくれ」るものが「気高く生きたい。気高く歩みたい。」というモダリティ形式を伴った自身の願望である、という微妙な不整合、あるいはコラムの末尾に引用される自作の詩が「一句」と数えられること^{*25}など、旧来の規範を厳格に適用すれば気になりだしてやまない細部の一々から、これらの日本語表現が踏まえる規範意識の大らかさ、あるいは書き手の日本語運用の（水準的）実情が看取される。こういった

ありようが、構文における文法的な整合性を求めず、先に推定したように条件句を欠落させ、後半部分の「なし得た」のみを切り取って使うようになる動向へ荷担している、と考えるのは、十分に肯われる話であろう。

最後になお付け加えることとして、「なし得る」の新用法の蔓延と、社会の「ポエム化」との関連について、さらなる注記を残したい。

小田嶋（2013）は、報道や行政などあらゆる分野において進行しつつある「ポエム化」（注 12 参照）を、「ある場面には説明放棄であり、別の場面では、幼児退行ということでもある」と捉えて、強い危惧を表明している（第 1 部第 2 章「ポエム化する日本」）。また、この指摘を受けて、NHK 総合テレビの時事問題を取り上げる番組でも「社会のポエム化」に関する特集が組まれて、話題となった（「クローズアップ現代」2014 年 1 月 14 日放送^{*26}）。

小田嶋（2013）の定義によれば、「ポエム」とは「詩になりそこねた何か」「詩の残骸」ではあるが、本来「詩」が内包する「情報を伝達するための言葉ではない」という特性、つまり散文における言語の論理性と対比されるありようを、その特徴としている。(7)が、コラムの終盤に自作の詩を「唐突に」掲げたり、詩の部分以外においても小田嶋（2013）の言う「猛烈にエモーショナルな」「感情過多」の「ポエム」（ただし「詩ではない何か」）ふうの文面を持つのは、自ら「心深き詩を贈ることで人の心を癒し、自分と向き合うことを支援する情熱の詩人カウンセラー」を名乗る^{*27}、すなわち小田嶋（2013）の言う「ポエマー」（poem + -er の構造による和製英語）であることとの関連において理解されるが、そういった細部に実現するようなある種の超論理（もしくは脱理論）性が、「ポエム」の特徴のひとつであり、その「ポエム」なるジャンルにおいて、「なし得る」「なし得た」が先に見たとおり激励や鼓舞のキーワードとして好まれ多用される現状は、言語変化の遠因とも関連付けられる背景的事情として、やはり特筆に値すると言えよう。

おわりに

本稿では、「何事かをなし得た人」なる表現への違和感に端を発しつつ、「なし得る」の新たな意味用法が、位相を限定しながらも広がりつつある実態について記述し、その変化の背景や経緯などについて考察を試みた。「なし得る」における「～得る」は、可能の意味を失って、完遂や達成を表すものと理解されはじめている。位相を限るという点ではこれを一般的な変化とすることは出来ず、いまだ変化の完了を見ないものではあるが、長い日本語史の一局面における変化の兆候として記述することは出来よう。「あり得る」の変化とあわせて〈動詞連用形＋得る〉という表現様式の変容を捉える本稿の記述は、可能表現の大局的な変遷史の一角に位置付けられるはずである。

冒頭に前置きとして述べたとおり、規範性の確かな資料には実例が求めづらいことから、

本稿では、インターネット上の使用実態やコーパスから得られた用例を積極的に用いたが、可能な限り、用例の使用者のプロフィールや表現が行われた時期を確認して明示に努めた。また、当該部分以外の文面に見える位相的な特徴にも十分な注意を払おうと努めた。ことばの側に求められる（本質的な特性や論理的な構造に即して解明されるべき）言語変化の契機とはまた別に、ことばを運用する側の問題に属する（規範意識や運用スタイルの）問題、あるいは変化が起こる時期の時代的特性（世相・社会風潮）などといったことが、変化の背景や経緯として記述できるのは、同時代においてなされる研究ならではの利点である、と考えるからである。全ては、本プロジェクトの総括を兼ねつつ、今後のさまざまな「新語・新用法」研究に向けた覚え書きとしたい。

-
- *1 一例を示せば、上二段活用動詞における五段化の動向など。少なくとも「用いる」の語については、五段動詞化は相当進行しているものと見られる（具体例等については【補注】を参照）。

また、「報いる」を五段に活用させた例として、新しいところで以下のようなものがある。

- (21) マルクス／レーニン以降の経済学／社会主義思想を学んだ彼は、日本という国家の構造が許せなくなり、権力の手先である警察に一矢報いるうとするのである。

（音楽雑誌『レコード・コレクターズ』2014年2月号、p.99。2014.1.15 発売）

この評論記事の書き手である和久井光司は 1958 年生まれ。稿者が機会を得て直接本人に確認できたところでは、いわゆるうっかりミスか誤植に近い例に当たるもののようであるが、校正の段階でも気付かれず見落とされたい。掲載誌は、1969 年創刊の『ミュージック・マガジン』の別冊として 1982 年から刊行され、爾来 30 余年の実績を積む、当該分野では権威と信用のある刊行物であるが、編集部による点検（4 人がかりで入念に行う由）をもすり抜けて五段化した語形が活字になったことは、この語形に対する今日的な違和感の希薄さを反映している。「用いる」「報いる」の 2 語が、口頭では行われなくなっている文章語的・雅語的な語彙であること（「用いる」よりは「使う」が、「報いる」よりは「応える」「リベンジする」などの語が、今日ではより日常的な表現である）も、少なからず影響していると見られよう。

- *2 BCCWJ から得られた、位相的な特殊性を有する用例、なかんずく孤例に近いものを取り上げ、そのみを根拠として論の根幹に関わる解釈や仮説を示そうとする共時論的研究を見かけたこともあるが、データの「均衡」性と「均質」性（両者は正反対のものである）を取り違えた事例であろう。さまざまな種類の資料に見られるさまざまな日本語をバランス良く（balanced な状態で）コーパスに収めるのは、「位相の異なり」に応じた「ことばのふるまいの異なり」を観察するためであって、出典の位相性は無頓着なまま得られた全ての用例を等しく扱うことは、危険である。特に、コーパスの均衡性ゆえ排除されずデータに含まれる質的・量的アノマリーに対する扱いの留意点については、balanced corpus（均衡コーパス）利用の基礎的な知識としてもう少し共有されてよいのでは、と思われる。

- *3 公開されたプロフィールによれば 1985 年生まれとのこと。
- *4 早く万葉集に仮名書きの確例が見られる〈動詞連用形+得^う〉は、「少なくとも中古から中世まで、様々な動詞に後接して可能その他の意味を広範囲に表していた」（渋谷 1993a）が、近世以降に文章語化しつつ意味領域を縮小した。近世後期の江戸語ではなお滑稽本などの会話中にもまれに使用が見られるものの、他の可能形式に取って代わられるように口語においては衰退した（渋谷 1993b）。明治初頭には、すでに文語文で行われる表現となつて、口語（口頭語）的なものではなくなっていた（渋谷（1993b）、小椋・小木曾・近藤（2002）、小木曾（2012）の各調査による）。渋谷（1993b）では、「補助動詞ウル・エルは、現在では口頭語からはほぼ姿を消し、文章語として用いられる程度にすぎない」とされている。なお、渋谷（1993a）は、中古から中世までの使用において「可能の用例には、実現系の可能を表しているものが多い」ことを明らかにし、現代語における「蓋然性」の意を表す用法を「明治期に新たに生じたか」としている。（仁田（1981）によれば、「可能性」は「蓋然性」に比べて「客体性、素材性が高く、作用性や陳述性が低い」もの、とされている。）
- *5 「～得る」の読みとしても、ウルとエルの両様がお併存するが、一段化しない語形で「言いウル」「探しウル」と読めば、「言いエル」「探しエル」と読む以上に、輪を掛けてこぼしたものの言いとなろう。
- *6 そのうち 35 件が、「文学は（化学は／学校は）何をなし得るか」のような問題提起のスタイルを取るものであった。
- *7 そのうち 17 件は、医学分野での臨床報告の類である。
- *8 公開日等については記載がないため不明であるが、通信研修講座の初回が 2013 年 1 月 9 日であることから判断した。
- *9 書き手の佐藤由明は、公開されたプロフィールによれば、1981 年生まれの産業カウンセラー・心理相談員とのことである（http://www.proseek.co.jp/pb/contents/column/s_profile.html）。
- *10 当該コラムそのものに更新日などの記載は一切ないが、書き手の個人サイトにおける「最近の活動」欄（トップページ）に、このコラムの更新を日付入りで告知する記述があったのを確認した（<http://satoyoshiaki.com/>）。
- *11 格言やことわざなどにおける文語調のもの言いが、印象としての格調の高さと連動して、ビジネスの現場においても説得力やありがたみを持つらしいことは、いわゆる「意識の高い」系の起業家が著名人の名言や古今東西の格言などを引用するのを好む傾向とあわせて理解される。もちろん、そのような名言や格言をたくさん知っていて、場面に応じて口にのぼすことじたいが、当人の人間的な価値や評価にも関わる、という考えが強いこと（敬語の種類にたとえば「美化語」的効果とでも呼べる効能に対する意識）にも、あわせて注意される。
- *12 小田嶋（2013）は、一見、文芸ジャンルとしての「詩」に似た様式を備え「受け手の感情を煽る狙いを持って」発せられる「エモーショナルな」「感情過多」の言語表現を、「ポエム」（あるいは「ぼえむ」）と呼び、それが報道や行政など「本来なら硬質の文体を持ちこたえていてしかるべきテキスト」にまで及びつつある現状を「ポエム化」と捉え論じている。

- *13 必ずしも「卓越した」偉業でなくてもよいという譲歩的な目標設定、自分なりのささやかな達成でよいのだとする目標の矮小化などを含む点で、ある種の「慰撫」めいたメッセージとなっている、との分析が可能である。
- *14 作詞者の Naoki Takada (SEAMO) は、公開されているプロフィールによれば 1975 年生まれ。
- *15 作詞者の HIDEITA は、公開されているプロフィールによれば 1975 年生まれ。
- *16 作詞者の Miliyah (加藤ミリヤ) は、公開されているプロフィールによれば 1988 年生まれ。
- *17 作詞者の桜井和寿は、公開されているプロフィールによれば 1970 年生まれ。
- *18 国立国語研究所の「Web データに基づく複合動詞用例データベース/日本語複合動詞リスト」に収められている語も、「なし遂げる」「なし崩す」の 2 語のみ (2014 年 1 月末現在)。なお、「なし崩す」の前項「済す」は、厳密には「成す」とは別語である。
- *19 これが二重否定の姿を取れば〈「～なしには」「～なければ」－「なし得ない」「なし得なかった」〉となり、先の (12) (13) がこれに該当する。この二重否定の構造を取る場合の用法が「なしとげる」への誤解と転義にあまり関与しなかったのではないかと考えられることは、先に示したとおり。
- *20 使用された時期 (1980 年代のもの)、あるいは使用者の世代 ((注 21) (注 22) を参照) を基準として判断した。
- *21 BCCWJ における当該部分の実著者情報は、山本七平・1920 年生まれとなっている。
- *22 BCCWJ における当該部分の実著者情報は、保田与重郎・1910 年生まれとなっている。
- *23 これらの分野のものについては、インターネット上での公開は、既存の媒体に対する代替手段として選択的に取られた情報伝達方法のひとつに過ぎず、そこで使用される日本語表現に、刊行物などとの位相的な同一性は保たれている。
- *24 「～たり」でつながられた一文中に、主文の主語「人は…」と重複する主格表示「人が」が出現する構造 (または、「人は」に対応する述語動詞「求めたり」と、これに呼応しない「いる」との並列)。
- *25 伝統的な規範にのっとりなら、詩を数える単位は「一編」である。
- *26 平易で取っつきやすいが曖昧で具体性を欠いたキャッチフレーズ、あるいは歯が浮くような甘く優しいことばによる過剰な鼓舞や慰撫の風潮が世間に氾濫している現状は、小田嶋 (2013) の言う社会の「ボエム化」に当たる。商用の宣伝のための広告表現はさておいて、違法紛いの過重労働を強いる企業が社員に向けて示す、あるいは増税を訴える自治体が市民に向けて発するスローガンの類に「ボエム化」が見られることは、労働条件や政策における不条理などの問題を見えづらくする点で危険である、との趣旨で「問題視」されていた。
- *27 公開されたプロフィール (注 9 参照) の記述による。

【補注】稿者が動詞「用いる」の五段化という動向に気付いたのは、ゼミ生の卒論指導を通じてであるが、提出させた卒業論文の草稿に「これこれの文脈では〇〇の語を用いらず、××を用いり…」 「これこれの意味では用いらない。」などと書いてくるゼミ生が現れはじめたのは、現在の勤務先に赴任した 2006 年以降、特にここ数年のことである。前任校で見かけなかったのは、学生の学力水準の問題もあろうが、時期的なことも関係するかもしれない。インターネット上のブログや質問掲示板等に見られる、この問題に関する記述のうち早いものも、おおよそその時期が一致する（以下は一例。(22) (23) は個人発信のブログ、(24) は質問掲示板に、それぞれ見えるもの）。

(22) 質問：「用いらない」って使いませんか？ (2005.12.5)

<http://blogs.yahoo.co.jp/teijisei2005/archive/2005/12/13>

(23) 今日も、「用いる」は五段活用に「用いります」って用いらないんですか？ (2008.5.28)

<http://jl-seminar.cocolog-nifty.com/blog/2008/05/>

(24) 日本語の質問です。「用い」と「用いり」の違いを教えてください (2012.7.18)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1090893250

参考文献

小木曾智信 (2012) 明治期国定『高等小学読本』の可能表現形式 (成蹊国文 45)

小椋秀樹・小木曾智信・近藤明日子 (2002)

「太陽コーパス」を使った近代語表現の通時的研究 ―口語文体・可能表現・待遇表現について― (国語学会 2002 年度春季大会予稿集)

小田嶋 隆 (2013) 『ポエムに万歳！』 (新潮社)

渋谷 勝己 (1993a) 意味の縮小と文体差 ―可能の補助動詞エルをめぐって― (『近代語研究第九集』武蔵野書院)

渋谷 勝己 (1993b) 日本語可能表現の諸相と発展 (大阪大学文学部紀要 33-1)

仁田 義雄 (1981) 可能性・蓋然性を表す疑似ムード (国語と国文学 58-5)

橋本 行洋 (1990) “けがる、けがす”と“よごる、よごす”：文体差から意味差へ (待兼山論叢 文学篇 25)

森山 卓郎 (2002) 可能性とその周辺 ―「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」― (日本語学 21-02)

※ J-POP の歌詞本文については、歌詞検索サービス「歌詞 GET」 (<http://www.kget.jp/>)

ならびに「うたまっぷ」 (<http://www.utamap.com/indexkasi.html>) を利用した。